

緊急特別シンポジウム

被災地は復興への支援をこんな具合に求めているのだ！

～ひと味違う報告・討論を聞いて大いに学び合おう～

主 催：明治大学大学院 新領域創造専攻 山本俊哉研究室
共 催：NPO「り・らいふ研究会」＋「仮設市街地研究会」
明治大学駿河台校舎・アカデミーコモン 2 階(A1-3)にて
2011 年 4 月 25 日（月）18 時～20 時開催

報告および討論の概要

（本稿は 4 月 27 日段階の速報／未定稿であることに十分ご注意ください）

本シンポジウムには約 250 名の方々が参加してくださり、被災地で活動をしているパネリストからの報告や問題提起へ、大きな関心と共感がもたれました。

なおシンポ終了後 22 時まで 1 階のカフェ・パンセにて懇親会が開催され、これにも 100 名近い皆さんが参加され、講師を囲んで有意義な懇談の場が持たれました。

開催主旨

東北から関東に至る膨大な地域に、想像を絶する甚大な被害をもたらした東日本大震災も発災後 7 週目となりました。しかしいまだ被災の全体像はつかみきれません。被災地・被災者の日々の生活を支援することが、今、もっとも大切ですが、長い時間がかかるであろう、すまい・なりわい・まちの復旧・復興にも目配りすべきはいうまでもありません。

復旧・復興に関与するまちづくりプランナーも、この間、多くのメンバーが被災地を訪れています。そのような方々の中でも、阪神・淡路や中越震災などでユニークな活動実績を挙げてきた何人かをお招きしての集まりです。報告・討論をいただくとともに、若い学生諸君も交え熱く学び合おうとの思いで、主催者&共催者が企画しました。

今日集まった皆さまの熱い思いは、やがて復興支援へと結びついていくものと確信しております。とりわけ若い方々には阪神・淡路以来の先輩たちの活動を知ってもらい、東日本大震災の復興支援に力を貸していただきたいと切に思います。東北の復興は、諸君が支えるべき 21 世紀日本の都市計画そのものであると考えるところですから。

そして今後、復興支援にかかわる民間&行政プランナーや研究者たちが緩やかに連携するための、ハブ or プラットホームというか、＜場＞がつくられていくことを期待したいと思います。阪神・淡路や中越などの経験を踏まえれば、その＜場＞は被災地と東京にコアが置かれ、開放的・中立的であり、かつ、求心力のあるものとして構想されるのではないのでしょうか。

2011 年 4 月 25 日

山本 俊哉（明治大学理工学部建築学科 教授）

高見澤邦郎（NPO 法人り・らいふ 理事長）

濱田甚三郎（仮設市街地研究会 代表）

次 第 （別途に約 60 頁の資料を配布）

司会進行：高見澤邦郎

開会挨拶：山本俊哉

（報告）

1. 「復興支援～陸前高田市の被災から考える～」 山本俊哉（明治大学教授／都市計画家）

2. 「復興のために集落単位の仮設住宅を！～陸前高田市長洞集落の場合～」

江田隆三（り・らいふ理事／(株)地域計画連合代表取締役）

3. 「陸前高田のその日、今、これから」

菅野広紀（陸前高田市議） 福田利喜（コミュニティFM設立準備人）

（討論）

上記報告者 4 氏に加え、延藤 安弘（愛知産業大学教授／まちづくりの語り部）、宮西悠司（まちづくりプランナー／まちづくり教の教祖）、濱田甚三郎（(株)首都圏総合計画研究所代表取締役／仮設市街地推進の騎手）、森反章夫（東京経済大学教授／思いの熱い社会学者）、矢野トンプー（まちづくりの造形家／NPO 法人アルデンテ主宰）の 5 氏から、問題提起及び提案

高見澤邦郎（司会進行）

それでは開会いたします。開会の挨拶を主催者の山本俊哉さんからいただくに先だって、会場の提供をはじめ多くの便宜を図ってくださった明治大学さんに、心より感謝の意を表したいと思います。

開会挨拶（山本）

皆さん今晚は。大勢の皆さまにお集まりいただき、まことにありがとうございます。開催の主旨は配布資料にある通りですが、今回の地震・津波・原発事故が重なった震災被害について、特に今日は津波被災地の復興について、これからの検討の素材を得たいと考えます。なお巨大な被災を受けた陸前高田市から3名の方が来てくださいました。追ってコメントいただくとして、早速私の報告に入ります。

「復興支援～陸前高田市の被災から考える～」 山本俊哉

- ・4月15日から19日まで12名で（全員が同一コースではありませんが）吉里吉里の大槌町から気仙沼市までを訪ねました。それぞれに地域特性が違うし被災の形も違う。復興への道筋も様々でしょう。まずスライドで被災状況を見ていただきます。

（スライドは当日配布資料参照。解説はここでは省略。以下についてもコメントの収録はごく一部とし、配布資料を参照願うこととする）

（仮設住宅地と「移動の足」の問題）

- ・復興への最初のステップとしての仮設住宅地づくりと、それにも関わって「移動の足」の問題がある。今、安全な高台に仮設の市役所、郵便局、コンビニなど暮らしのインフラ施設が建てられつつあります。さらには仮設住宅が建設されようとしているが、圧倒的に建設用地が不足して避難所生活は長引く。結局仮設住宅は分散的な建設になっていき、集落ごとの入居は難しそう。さらには抽選方式であることも離散を進めている。
- ・いずれにしても狭い土地の仮設の街では、移動の足である自動車が狭い土地を占領し、溢れかえっています。元々公共交通のインフラが弱いところに被災を受けた。一層のマイカー依存で車が場所を占拠する一方、お年寄りなど交通弱者は移動の手段を失い、生活に困窮する。このようなことからして、車の量と駐車スペースを減らし、交通弱者を手助けできるような「クルマのシェアリング（分かち合い）」を提案し、その実施を目指したい。
- ・それを被災地復興の基本理念として整理すれば、「共生」：自然環境との共生・環境負荷の最小化、「協働」：個人所有から「分かち合い」へ、「自律」：自立し、かつ「互いに支え合う」の三つとなろう。これを基本として、「21世紀型市街地・集落形成に向けた弾力的復興」を考えていきたい。

（復興まちづくりに向けた動き）

- ・高田には日本三大松原と称される全長2キロの高田松原があったが、1本を残して壊滅した。僅か1本ではあるが、希望の松として復興へのシンボルになっている。地元で何代も続く醤油醸造販売の八木澤商店・河野和義さんは「似非学者、似非コンサルはいらぬ！、気仙大工による木造住宅を高台に、中心市街地の土地は国が買って国有地に、大学と若者を誘致しよう、代替エネルギーに取り組もう」と意気盛んでした。
- ・また4月17日には、地元から分野や地域の異なる6名の住民代表の参加を得て「明日のグランドデザイン」に関するワークショップ形式の検討会議を開催したが、漁業復活のためには漁船のシェアリング、そのための会社設立などたくさんアイデアが出た。中でも防災FMの開局と復興を目指すNPOの設立が、急ぎ実現すべきテーマとして合意された。

（復興支援―陸前高田の被災から考える）

- ・陸前高田から考えたことを6項目として示し、私の話を終わりたい。1. さらに安全な防潮堤を再建するか：巨額の公共投資を要し「安心の共同幻想」を呼びかねない 2. まずは生業の再建：仮設の漁港・魚市

場・屋台村・テント村……組合や会社で。 3. 広大な罹災地の公有化は可能か：売っても二束三文？先祖代々の土地を手放せるか？ 4. 理想はコンパクトシティ、現実が高台分散集落：交通需要マネジメントの必要性・重要性 5. 地元住民の想いは、咲紀が見えない不安の中で家族の生活に早く戻りたいこと：これ以上の「人のつながり」を失いたくない……復興の道筋に仮設と本設の中間がないか。 6. 遠隔地支援のあり方：情報機器の活用を図りつつ復興支援のハブ拠点づくりが大切。

(拍手をもって終了)

- ・続いて福田利喜さんと菅野（かんの）広紀さんにお話したい。お二人とも消防団員でもられます。

「陸前高田のその日、今、これから①」 福田利喜

- ・今晚は。福田利喜と申します。52歳の今に至るまで、200人の中学同級生のうち亡くなった者は僅かでしたが今回の津波で10人を超える友達を失いました。避難所や遺体安置所で同級生に会っていると、大変だったなと声を掛け合いますが、すぐに、「がんばろうべな」と言葉がかわります。あまりにも多くの家族や友人が亡くなったけれど悲しんでいる暇もない、前に向かって進もうよというのが今の住民たちの心境です。市役所職員の三分の一が亡くなりました。ぼくの仲間も何人も亡くなりました。家内も戻って来ませんでした。災害孤児が20何人とも言われます。
- ・チリ地震の時は2歳。縁の下まで水は来たが明治の頃の土蔵も大丈夫だった。今回は屋根の上を水が通り越して行って何も残っていません。当日は市役所の近くで市議選の選挙運動をやっていたのですがそろそろ消防団の方へと移動したときに地震が来ました。やがて堤防の50センチ下まで水が来て、もういかんとみんなが高台に逃れました。
- ・その後連日消防団として活動してきましたが、やっと、どうやったら生きていけるのかを考えるようになりました。配布資料の終わりの方に、4月17日のワークショップに持参したメモを載せてくださいました。今やらなくてはいけないこと、次にやらなくてはいけないことを書いてみたものです。まったくのゼロからのスタート。いろんなことを同時並行にやらなくてはいけない。（詳しくは配布資料を参照のこと。「災害過疎を起こさせない」をタイトルに、早急にしなければならないこと10項目、そのために現在必要なこと7項目が載せられている）
- ・陸前高田では地震が来れば津波、高台に避難は常識だった。しかしここ数十年、毎年5月24日の防災訓練では、朝4時半にサイレンが鳴り2千人を超える人たちが集まるのは国のマニュアルに従った避難場所。これが仇になった。きちっと高台に逃げるといふ昔からの考えが薄らいでいた。またチリ地震から時が経って、再び低い土地に家を建て始めていたのも被害が大きくなった一つの要因。災害はその土地土地に異なった被害をもたらすことに思いをいたすべきだった。国の一律の防災対策をそのままやっては駄目なのだ。
- ・我々は忘れないということも必要だが、忘れなければいけないこともあるのだと思う。多くの教訓を明日にいかそうとがんばってまいりますので、全国の皆様のご支援をよろしくお願いします。（拍手）

「陸前高田のその日、今、これから②」 菅野広紀

- ・菅野広紀と申します。私自身は山間部に住んでいるもので被害はなかったし、地震が来た時は、たまたま上流の住田町で会議があったため難を逃れました。すぐに地元に戻ったが、固定電話も携帯電話も使えない。消防庁の指示でその夜から重機8台をもって瓦礫の撤去（と遺体の探索）。
- ・避難所を訪ねれば知人友人、一体どうなるのだろうと。メールが通じるようになって多くの先生方から便りをいただいている。物資は大体大丈夫で欲しいのは知恵です。震災後2週間、3週間、先生方も来てくれて先ほどのワークショップなども行われた。ぼくらは10年、20年先のこのまちをどうしようか、娘、息子の世代にどうつないでいくのかを考えたい。市役所は多くの職員を失い、毎日の対応で精一杯です。いろんな外からの知恵を借りて、「こんな素晴らしい陸前高田のビジョンをつくっていききたいね」と言い交わしている。

- ・ボランティアも多く入ってくださり、感謝しているが、こちらから情報をきちんと伝えないといけないと思う。中越地震後に行ったが、自分自身、役に立っているのか分からない状況もあった。情報がしっかりしていないとボランティアもとまどう。陸前高田の災害FMは大船渡市に委託しているが、地元の特化した情報をもっと欲しい。そこで地元でネットワークをつくり地元の情報を発信しようと、ここでの災害FMづくりを始めた。コミュニティFMの経験のある方からも知恵を借りたい。
- ・復興への道筋を考える上でいろんな知識やアイデアを今日お集まりのみなさんからいただきたい。ただしそれをどう使うかの判断は私たち陸前高田の市民に任せていただきたい。そして一緒に素晴らしいまちをつくっていききたい。どうぞよろしくお願いします。（拍手）

「復興のために集落単位の仮設住宅を！～陸前高田市長洞集落の場合～」 江田隆三

（被災地の概観）

- ・り・らいふ研究会と仮設市街地研究会の両方に属している江田です。後者ではいくつかの提言をしてきましたが、これはまた後に紹介されると思います。支援の前線基地をつくる、集落の具体的支援をできないか、などを考えています。
- ・ひとまず被災地の状況を見てもらいます。田野畑村、小さな集落が多く急峻な地形で台地は標高 200m ほどのところ。田老町、高さ 10m で二重構造の防潮堤を津波が越えた。宮古市、市街地は大きいがかかなりの被害で火災も起きた。次に山田町、そして大槌町、吉里吉里の町。さきほど来の報告があった陸前高田市、7 万本もあった松が 1 本に。気仙沼市、船が市街地に上がった。標高の低い港町をどう再建していくのか。（内陸部から沿岸都市を支援）
- ・岩手県は広い。沿岸が被災したが、内陸の都市が支援をしようとしている。例えば花巻と釜石の中間地点、昔から沿岸と縁の深い早池峰山もある遠野市は沿岸都市後方支援室を立ち上げた。すでに 500 人ほどが釜石、大槌、陸前高田から親類縁者を頼って一時避難に見えている。また 14 日付けで、応急仮設住宅を大槌町被災世帯向けに 30～100 戸程度建設する仮設集落づくりの要望を市長から県に提出している。地元産を使う木造仮設、店舗もある仮設とか我々が主張してきたことに近くて期待されるが、法制度の制約や市町村間の合意等の問題をクリアーできるか、県も検討中のような（以上資料集に収録）
- ・もう一つ、住田町の木造仮設住宅を紹介しておきたい。避難者の受け入れや遺体安置所の設置など陸前高田への後方支援をしている。住田町は林業のまちで、ちょうど木造仮設の研究をしていたところに地震が起きた。研究の成果もいかして早速 3 月 22 日に 93 戸、独自に着工した。さらに 17 戸は公募でなく陸前高田の病院に勤める看護師さんなど向けとされているのもユニークだ（木造仮設については資料集に収録。なおその後、27 日の報道によると 4 月上旬の募集に 239 世帯が応募し、その約 9 割が陸前高田市の被災者だったという。またこの独自の木造仮設住宅建設に着目した「モア・トゥリーズ（国内外で森林再生を展開している一般社団法人）」が 3 億円の寄付を募り、さらに 110 戸建てる活動を開始したという）。

（陸前高田市長洞集落の紹介）

- ・この集落は市街地から離れた都市計画区域外にあるのだが、60 戸のうち 28 戸が 15m から 20m の津波の被害を受け、集落としても孤立した。そこで集落で米、油、水、薬……みんな持ち寄って分配するシステムをつくった。仮設市街地研究会が考えていた、避難所のコミュニティを仮設のコミュニティへ、そして復興への流れが実現している。被災世帯は残った住宅に分宿している。このまま抽選方式の仮設応募で他地域に分散していくのはよくない。まとまって入れてくれ。そのための仮設を集落内につくってほしい、土地の確保は自分たちでやる、と申し入れている。しかし制度は、県が建設し入居の抽選は市町村が行うとしているから、実現にはハードルが高い。何とか実現にもっていききたいものだ。
- ・以上 2 回の被災地調査を通じて、小さくても本質的な試みが仮設住宅建設をめぐるって起きていることを紹介しました。そのような仕組みを広げ、よりよい復興の実現へつながっていくことを期待して、私の話を終わ

ります。(拍手)

(高見澤)

それでは休憩なしで、討論者の 5 氏とただいま報告をされた 4 氏に前に並んで座っていただきます。会場はあと 1 時間しか使えません。話し出せば汲めども尽きることのない論客の皆さんに、「ごく短い時間での発言」を求めるのは心苦しいけれど、ひとつよろしくお願いします。

先週から被災地に入り、つい今し方戻って見えた、宮西さんと延藤さん、まずお話願います。

宮西悠司

16 年前に阪神・淡路……。長くつきあっていた真野に、被災直後からずーっと入っていた宮西です。私は松島の手前、塩竈で生まれたので何とか訪ねたかったのだが、ようやくふると塩竈、そして多賀城市、石巻市と行くことができました。辛い風景もあったが友人たちの熱い思いにもふれた。

さて、ゆうべ延藤先生と徹夜してまとめたスライドと資料をご覧にいます。延藤先生よろしく。

延藤安弘

- ・ 私たち、現場から謙虚に何を学ぶことができるか、考えながら歩きました。最初に訪ねた荒浜は、美しい 1,500ha の水田がこんな姿(スライド)になってしまった。塩害が心配される田んぼに菜の花を咲かせ、数年かけて回復させようではありませんか。この被災を予想だにできなかった人々にとって本当の復興とは何か、考えねばなりません。塩竈の商工会議所で地元の方々と話しあいを持ちました。この絶望から立ち上がるお手伝いは、我々都市や建築の専門家だけでなく、産業、就労支援、いろいろな専門家が入って進めるべきと思います。
- ・ さて仙台市荒町養賢堂で行ったシンポジウムでのやりとりから、お配りしたような「まとめ」をつくりました。〈これまでの価値観→これからの価値観〉を挙げます。1. 自然征服→自然の悪意を防ぎつつ善意の仲良く 2. 効率性→職の再創造として漁業・農業の担い手としくみづくり 3. 均質性→住を通してふるとを 4. 生産者と消費者の分離→食をつくる力と食べる力の合流 5. 商業主義→文化の楽しさと地域の底力の育み 6. 競争性→子どもの育みをコミュニティと自然の中で 7. 制度依存→福祉の安心は人と人との間・人と自然の風通しから 8. 技術信仰→エネルギーのつくり方と使い方に新しいスタイルを。…以上の頭文字をつなぐと、〈自・職・住・食・文・子・福・エ〉となる。今後の社会と東日本の再生はこれらの時間・空間の総合的実現にかかっているのではないだろうか。時間が参りましたのでこのあたりで。ありがとうございました。

(拍手) (スライド映写の入った「語り部としての延藤さん」の魅力を本要録では伝えきれていないことをお詫びします。お話の肝心要の言い回しは収録できていません)

(高見澤) では次に仮設市街地研究会のメンバーとして被災地を訪ねられた濱田さん、森反さんから。

濱田甚三郎

- ・ 濱田です。私、紀伊半島の鯉節屋の三男坊でして、子どもの頃三陸から来た職人さんにお風呂に入れてもらった記憶もあります。東北への思い入れは人一倍です。仮設市街地との言葉が生まれて 17 年目になった。配布資料にありますように、研究会では 3 次にわたる緊急提言をしましたのでご覧を。
- ・ 仮設市街地のポイントは、住と職と復興を一体的にということにある。その際の一番の問題は抽選による仮設住宅入居がコミュニティを壊してしまうこと。それを何とか打破したいと江田さんの報告にあるように陸前高田・長洞集落で活動を開始した。市の方も見えてくださり、ありがたいことに連休後に仮設住宅を建て

る方向で進んでいる。

- ・三つ目の提言書は客船の係留。ずーっと被災地を回ると、もう陸上からだけでは駄目だ、海からもだ、と考えた結果です。調べたら今、2千ベッド（約670世帯入れる）を備えた1.3万トンの中古客船が5億円で買える。3年間の維持運営費を入れても、一戸400万円の仮設住宅費用で十分にまかなえる。菅さんが決断すれば1ヶ月で用意できる。再度津波が来ても外洋に逃げることができる。前代未聞の災害なのだから前代未聞の対策も考えてもらいたい。以上です。（拍手）

森反章夫

- ・仮設市街地研究会と、り・らいふ研究会の両方に属してます。阪神・淡路を踏まえて、仮設市街地をつくらなければ、単なる仮設住宅では復興につながらないと強く我々の仲間は認識している。その延長上に今の大型客船構想も出てきた。
- ・今回手伝うことになった長洞集落は沿岸の392集落の典型というか一例です。ひとつの集落での試みは392へも波及するだろう。長洞のすごいのは被災者と被災を免れた人が罹災後暮らしを「シェア」したことだ。そして集落では28戸が破壊されたのだが、24戸の仮設住宅を建ててもらえれば何とかしのげる、次につなげると自ら申し出たことだ。集落に抱かれた仮設住宅ができれば復興につながる会合ができる。阪神・淡路では制度の制約でそれができなかった。
- ・市は集落の案を却下したが、もう一度集落は陳情し我々も市を訪ねた。何とか15分建設部長に会うことができた。事務的に始まった会話だが結局45分の熱い話し合いとなった。がんばりましょう、とエールを交換して終わろうとしたとき、部長は「この気仙には＜結い＞がある。学者が言うようなコミュニティなんて洒落たものはない。市民といった近代のものでなく、もっと深く日本の社会にあるのが＜結い＞だ」と。お互いに労苦を分け合い、シェアして進んでいく、そういう力強さがここにはあると気付かされた。

以上です。（拍手）

山本俊哉

- ・今日も2時から菅野さん福田さん、そして訪れたメンバーで話し合い、長洞も含んだ陸前高田の支援を私ども、続けていくことにしました。地元からは、若い人や女性の参加がほしいとの声も出た。さて問題は我々が遠隔地をどう支援していくのだが、高田の支援には一関の役割が大きいと思う。一関は陸前高田と気仙沼を応援しようとしている。気仙沼は宮城県なので県境を越えた支援となる。広域的な結びつき。そこに我々も入っていくことができそうだ。このような枠組みがつくられ、自治体間の相互理解が進むことを願っている。

福田利喜

- ・長洞は私の住んでいるすぐ隣。陸前高田には行政区が全部で108ある。被災地区の暮らしは、今、この単位の中で町内会・部落会ごとに行われています。それぞれの中で住民が役割を分担してしのいでいる。町内会単位で土地を用意して住みたいという希望を出している。先生方の熱い思いが建設部長、私の先輩だが、に伝わったようです。今、消防団員としても回っているのだが、「おい福田、ここ、牛を飼う牧草地なんだけど仮設建てていいよ。市役所に言ってこい」と。早速市役所に伝えると「ほんとですか。じゃ明日見に行きます」と。おかげさまでこんな状況が見られるようになってきてる。自主防災とかコミュニティとか言うが、結いです。昔からの生活が息づいているのが陸前高田。
- ・もう一つ、この地域は、私の場合もそうなんだが、両親、家を出た子ども、家から学校に通う子ども、三世代が多い。中には四世代の世帯もある。なのに応急仮設の標準は4.5畳二つとダイニングキッチン、これでは家族の暮らしが成り立たない。家族の絆が崩れかねない。標準だけでなく地域によって大きなものも少し

つくれる柔軟さを国に求めたい。それによって次への立ち直りがずっと早くなるのではないかと、そう考えています。

- ・最後に。私の部落の場合も、我が家の精米器を運んで石屋さんが持っていた自家発電機で回し、みんなが持ち寄ったお米を精米し、炊いた。本格的な支援が来るまでそうやって耐えた。そんな地域が長洞をはじめたくさんある。集落はみんなそんなシェアの精神に溢れている。こんな地域であることも、先生方が後押しを決意してくれた原因の一つだと思うし、全国に向かって誇りをもって発信できる現地情報だと思っています。(拍手)

菅野広紀

- ・先生方が見えたときに、理想的なまちをつくる話が出たが、なりわいとして何を……、の話題にハッとした。女房の実家は漁業をやっていて、幸い沖まで移動できたので船は助かった。ホタテの養殖は二年、三年かかる。すぐカネになるわけではないし、船をつくった時の借金もある。どうやって暮らすか。先ほどシェアという言葉が出たが、そんな協業の方法についても勉強してみたい。牡蛎だって「俺んとこのは築地で一番の値だ」と自慢していたんですが、個人の事業。それがもしかすると船を共同で買って協業という手もあるのではないかと。いずれにしても、暮らしを再建しながら陸前高田を素晴らしいまちにしたいというのが私の思いです。(拍手)

(司会・高見澤)

ありがとうございます。造形作家というちょっと違う立場からとなりましょうか、矢野さん、お願いします。

矢野トンプー

- ・16年前まで造形作家でした。阪神・淡路の時に、段ボールなど使いながら避難所を快適にする作業をしました。やがて東京に帰ってからは、造形の間というより知的障がい者・障がい児のコミュニケーションの場づくりに打ち込み、NPOを設立して今日に至っています。震災後、行かなければの思いにかられながら余りにも被災が大きいことに戸惑った。阪神・淡路では時間の経過に伴って状況が変わった。それにどう対処するかがポイントだったが今回は余りにも広い。広くてみんな違うから、同じことをいろんな場所でやろうとしても通用しまい。どこまで個別をつかめるか自信がない、それも被災地に一歩踏み出せなかった理由です。
- ・そこに延藤さん宮西さんからお誘いがあった。それで今回はひたすら黙ってついて行こう、そして被災地で勇気をわかせてもらえる種、源流を探すよりしょうがないのだからと覚悟した。そしてそのような種のある場所に、かつてのぼくたち、若い人たちを送らないことには長期の復興はないだろう、そう思います。
- ・被災地に人がいない。それが津波の怖さだ。しかしそこになりわいを再び起こす。それにはそこに住むよりない。食べ物を扱うなりわいが壊れた。何とかしなければいけないと思いつつ、呆然と回ってきた。東京に今戻っても足の裏がぬるぬるするような違和感がぬぐえない。楽しみをもたらしつつ長い復興を支えられる若い人の滞在が必要だ。楽しみ、喜びを共有できるプログラムはないのか。そのことを考えていくべきだ。(拍手)

(司会・高見澤)

モノをつくる人としての話でもありました。では皆さんから最後に一言ずつ。

宮西悠司

- ・真野も一段落してからは耐震補強に取り組んだが今ひとつ打ち込み切れなかった。阪神・淡路で真野に飛び込んだ二日目、盟友の小林郁雄と連絡を取り、俺はもう5千人の真野だけでがんばる。おまえは30万人全

体だ、と話し合った。そう、私にとっては小さな一つの現場こそが大切なのだ。守ること、つくることができるのは小さい単位なのだ。皆さんも小さな単位に飛び込んでほしい。

延藤安弘

- ・お配りしたメモから一つ二つ。「2. ぼんやりした変化をつかみとり、よりよい変化を促す場づくり」と書きました。我々は被災者の小さなつぶやきに耳をそばだて、例えば先ほども出た、なりわい、いきいき、そんな概念を大事にしたい。
- ・高台に家を建てる巨大な絵が一人歩きしているが、通勤漁業といった近代的ゾーニングよりも前に、危険を防ぎながら暮らす、住まいと生計をどうカップリングしたらいいのか、そういったことを真剣に追究する、それが大事なのです。いままで見えなかったところをつなぎ止める発想が大事。そのことをメモでは「7. インパクトのある複線モデルの現場を発見し赴こう」と書きました。

ありがとうございました。(拍手)

濱田甚三郎

- ・大型客船の話をもう一度。板子一枚下は地獄、これは海に生きる人の悲哀を言ってるんです。海でしか食えない海の人。海岸には仮設の作業場、仮設の市場をつくって生き延びようではないか。客船係留はこのような生業をも含んだ提案です。是非ご支援をお願いします。(拍手)

森反章夫

- ・仮設市街地の理念を何とか実現したいと考え手立てを尽くしている。社会学者という力のない身で官公庁回りもしている。これからも実現に向けて継続します。(拍手)

江田隆三

- ・現実的なコンサル(笑)から提案します。グリーンツーリズムの思想も取り入れよう。被災地では仮設民宿、仮設食堂、仮設販売所を設けてボランティアたち、支援者たち、さらには町の人を迎え入れる。おいしいものも食わせる。そして交流する、少しはお互いにリラックスする……。半農半漁の気仙の家は大きい。学生さんも泊まれる。是非、バスを仕立てて若い人たちを連れて行きたいと思っています。(拍手)

(司会・高見澤)

それでは最後に主催者の山本先生に。

山本俊哉

- ・あっという間に2時間が経とうとしています。質問したい、意見を言いたいとお気持ちを重々感じますが時間の関係で申し訳ありません。お手元の用紙に忌憚なくお書きになって提出してください。後刻、整理して何らかの形で発信したいと思います。
- ・さて、話の中にもありましたが、災害 FM が大事である。今、陸前高田は大船渡にこれを委託しているので地元だけの情報というわけにはいかない。そこで何とか地元で FM をと聞き回ったところ、免許は災害対応で取りやすいが、当然に受け皿が必要、もちろん機材やノウハウも必要と分かってきた。さて、というときに関西は堺市の NPO 法人・さかい hill-front forum から手が上がりました。私もつきあいのある NPO です。代表の池崎守さんは少し前にコミュニティ FM を立ち上げており、さらにそれを一緒にやった NEC の村上卓己さんもよっしゃと加わった。池崎さんは早速地域の連合自治会で基金を募り、短期間に 100 万円を集めてくれました。一言お願いします。

（池崎） 私も住民活動をしてますが、住民自らが立ち上がることが大切です。今回の基金もその思いで、役に立てばと思ってます。お許しいたいで皆さんの前でお渡します。

・ありがとうございました。一日も早く FM をと願います。会場の皆さんもお帰りのときに募金箱にカンパいただければ幸いです（後日談：14 万円集まったとのこと）。

（司会・高見澤）

では今日はこのあたりで。いずれにしても情報―被災情報の段階から復興等の活動の情報に移りつつありますが、情報や活動のプラットフォーム、ハブを構築して、このようなフェイス・トゥ・フェイスの集まりとともに日常的に情報交換ができるようにしたいものです。

今日の報告・討論者の皆さんには、また会場の皆さんには、もっともっと話したいことがお有りだったでしょうが、またの機会にとして、終わりにいたします。ありがとうございました。

（大きな拍手で閉会）

パネルディスカッション終了後、1 階のカフェ・パンセで懇親会がもたれ、約 90 人の参加で歓談がすすんだ。